



2019年度
入賞者作品集

目白大学 新宿図書館

2019年度
読書推進プログラム
入賞者作品集

目白大学新宿図書館

もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	3
受賞作品	
〔一等・特別賞〕	
生まれ変わりゆく街と変わらない人々 丸山 寛紀（社会情報学科4年）	5
〔二等〕	
「自分勝手」が未来を脅かす 會田 榛馨（心理カウンセリング学科3年）	8
これからの日本に必要なものは何か。 白岩 綾花（心理カウンセリング学科3年）	12
〔佳作〕	
将来の夢について考える 青山 明日香（心理カウンセリング学科3年）	15
『置かれた場所で咲きなさい』を読んで 大曾根 帆風（韓国語学科3年）	18
ホセ・ムヒカに学んだこと 鈴木 瑞貴（心理カウンセリング学科3年）	21

受賞者一覧

【一等・特別賞】

丸山 寛紀（社会情報学科4年）

【二等】

會田 榛馨（心理カウンセリング学科3年）

白岩 綾花（心理カウンセリング学科3年）

【佳作】

青山 明日香（心理カウンセリング学科3年）

大曾根 帆風（韓国語学科3年）

鈴木 瑞貴（心理カウンセリング学科3年）

【参加賞（応募受付順）】

張 希至（日本語・日本語教育学科3年）

時枝 瞳（日本語・日本語教育学科3年）

小菅 優花（心理カウンセリング学科3年）

長谷山 黎（心理カウンセリング学科3年）

西谷 千里（日本語・日本語教育学科3年）

齋藤 真莉菜（韓国語学科3年）

下谷 真由（韓国語学科3年）

武田 萌（社会情報学科3年）

和須津 恵理（社会情報学科3年）

佐藤 達也（社会情報学科3年）

須田 愛香（社会情報学科3年）

小野 歩（社会情報学科 3 年）

今里 花蓮（韓国語学科 3 年）

福原 京香（韓国語学科 1 年）

渡邊 優夏子（韓国語学科 3 年）

宮田 寧音（韓国語学科 3 年）

田澤 朋英（韓国語学科 3 年）

後藤 紀明（社会情報学科 3 年）

館長講評

読書推進プログラムに応募し、高い評価を得て受賞した学生の皆さん、おめでとうございます。

目白大学新宿図書館長として、謹んでお祝いを申し上げます。

1等 特別賞 「生まれ変わりゆく街と変わらない人々」

社会情報学科 丸山寛紀さん

人々の移動速度の速さや流行の変化など、変わりゆく街としての東京に戸惑いながらも、多様性や利便性など東京の変わらない本質に魅力を感じている様子がみずみずしい筆致で描写されています。本作品は、「東京学」(小川和佑)を手掛かりにした東京論であると同時に、作者が東京と折り合いをつけてゆく物語でもあります。難しいことをわかりやすく述べる技術と大学生らしい感性とが高い水準で融合している点が審査員から高く評価され、今回の授賞となりました。

2等 「『自分勝手』が未来を脅かす」

心理カウンセリング学科 會田榛馨さん

最近の報道を手掛かりにした導入から、環境問題を考える上での古典「沈黙の春」(レイチェル・カーソン)に基づく本論へと展開してゆく構成力が光ります。加えて、第2段落での「ほんの少し心理学を離れたいな」という心情の吐露や、結びの2文の決め台詞、巧みに感情を揺さぶります。高い文章力に裏打ちされた完成度の高い作品です。

2等 「これからの日本に必要なものは何か。」

心理カウンセリング学科 白岩綾花さん

自らの意思にかかわらず、制度上の安全が確保された状態が「安心社会」、制度上の安全が保障されていなくとも、相手の評価をもとに主体的に安全を期待

する「信頼社会」。日本社会は連帯責任による「安心社会」であるがゆえに本来的にいじめを誘発する。心理学を専攻する著者らしい日本社会論になっており、丁寧な論理構成が高く評価された作品です。

佳作 「将来の夢について考える」

心理カウンセリング学科 青山明日香さん

進路への迷いについての書き出しから始まり、寓話「夢をかなえるゾウ」を読み、夢と職業との関係についての気づきに至る。この文章自体が、夢をかなえたい大学生への寓話として読むことができます。

佳作 「『置かれた場所で咲きなさい』を読んで」

韓国語学科 大曾根帆風さん

「置かれた場所で咲きなさい」（渡辺和子）を手掛かりに、自らの高校時代を深く内省している点が評価につながりました。過去を振り返るだけでなく、未来への決意へと繋がっている点がさわやかな読後感をもたらしています。

佳作 「ホセ・ムヒカに学んだこと」

心理カウンセリング学科 鈴木瑞貴さん

南米ウルグアイの大統領ホセ・ムヒカの評伝をもとに人生の喜びとは何か、信念はどうして大切なのかについて考察しています。「幸せは大切な人との和やかで笑いあえる時」作者らしい幸福論になっています。

審査に当たった先生方、本日の表彰式にご臨席賜りました学長先生をはじめとする皆様、プログラムの告知から本日の表彰式まで運営をしてくれた図書館スタッフにお礼を申し上げます。

新宿図書館長 今野裕之

一等・特別賞

生まれ変わりゆく街と変わらない人々

社会情報学科4年

丸山 寛紀

僕が東京に住み始めたのは高校一年生の時。

高校に入学したと同時に東京での生活がスタートした。それまでずっと静岡で育ってきたので東京で暮らすということに不安でいっぱいだった。静岡人としての東京に対するイメージはというと、「人が多い」、「ビルがたくさんあって緑が少ない」、「満員電車がしんどい」「犯罪が多い」といった具合で、なんとなくマイナスなイメージを思い浮かべることが多かった。それと同時に東京に行ったら芸能人に会えるかもしれないという田舎者特有の浮かれた気持ちもあり、密かに東京に住んでみたいという憧れた気持ちも同時に存在した。しかし東京に住み始めて約7年経つが、そうしたイメージも次第に変わってきて、東京に対するプラス面の気持ちも多くなった。

この本を選んだ理由は、単純に東京のことをもっと知りたいと思ったからだ。東京のことを研究している本があるならば、東京という街を学問として、どのような着眼点で分析しているのか興味があったからだ。せっかく東京に住んでいるのだから、東京という街を深く知り、自分なりの東京観と比べてみて共感できる部分や、自分が知らなかった東京の一面を発見することができたらと思い、本書を手にとった。

この本の内容は東京という街を、江戸とは違うということを明確に示し、多角的な視点から分析している。その中でも特に印象に残ったのは、第二章の「東京の人は冷たい」という風潮に対する考察だ。

まず東京を語るうえで重要なのが、東京は江戸の延長ではなく、むしろ江戸文化を断ち切り、西洋文化を取り入れた新たな街として再出発した街なのであるということだ。そのような江戸と東京の明確な違いを知ったうえで、東京を

分析しなくてはならない。

東京の人は冷たいという意見がなぜ沸き起ってしまうのか、ずっと疑問に思っていた。

特に地方の人々から東京の人は冷たいという意見をよく耳にする。自分も最初のころは改札を出るとき、電車に乗るときなどの際に、自分が先に行きたがる人たちに、戸惑ったしイライラした。しかし東京に住み始め、大学に進学し、電車を利用して移動する生活を始めると、先を急ごうとする東京の人々の気持ちが痛いほど分かる。慌ただしい毎日に追われていると、なかなか気持ちに余裕がなくなる。冷たいと思われてしまっても仕方がないのだ。地域ごとに生活スピードに差があるという記述にハッとさせられた。最初は東京のスピードと静岡ののんびりとしたスピードが合わなかっただけということに気づいた。本書にも書いてある通り「東京の人は冷たい」というイメージは偏見とまではいかないが誤解なのだ。自分が住んでいる場所とは違う場所に行くときは心がけておきたいところだ。

しかし、東京のスピードに慣れるには個人差があると思う。昔は、複雑に入り乱れた街を颯爽と行き交う東京人に対して異星人を見るような目で見ていた。最初は新宿の街なんか一人で歩くことなんてできないと思っていたが、その新宿にある大学に通うことになり、嫌でも通らないといけなくなると、気づいたころには一人で都内の街を出歩くということに何も躊躇がなくなっている。自分は東京に染まっているとは思っていないが、もし過去の地元の人たちに会ったら、東京に染まっていると言われるのだろう。今でもときどき思うが、小さい子供が一人で電車に乗っているのを見ると、「こんな小さいのによく一人で電車に乗れるな」と、あまり電車に乗る機会が無かった自分からすると、「東京の子供恐るべし」と思ってしまう。そのような感情が沸き起こるたびに、東京生まれとのギャップを感じてしまう。でもそんな環境に差がある人達がいるということも面白いと思えるようになった。

時代ごとに移り変わっていく街の姿も魅力のひとつだ。本書が発行されたのが平成12年、つまり今から20年近く前に書かれた本なので所々時代を感じ

させる光景を思い浮かべさせる記述がある。しかし、食やファッションの流行が目まぐるしく移り変わっていくとしても、それらを楽しむ人々の好奇心だったり、群集心理などは、今も昔も全く変わっていないと思った。

著者の東京は包容力の街という主張にととても納得している。新しい文化を受け入れながら変革してきた歴史には重みがあり、他のどこの街よりも寛容的だと思っている。

しかし、上京して東京に移り住んだ人たちは、自分は東京に向いていないのではないかという思いを日々抱えながら生活していると思う。自分もその一人で満員電車や人ごみを日々の中で経験していると、この喧騒から抜け出したいという思いが強くなる。かといって静岡に戻りたいとも、他の地方に移り住みたいとも思わないのは、東京の利便性の良さに慣れてしまったからであろう。

この本を読んで自分が抱えている東京観を再確認した。東京という街は時代によって変わっていく部分と、変わらない部分を楽しむことが必要で、東京は何度も転生するとあるように、生まれ変わっていく街として受け入れることができる人になりたいと思った。

東京学というのは、この大都会に住んでいる一人一人に自分なりの東京学があり、それらがいくつも折り重なって東京学を形成しているのだと思う。人が多い分出会いも多い、ビルがたくさんある中にも緑がある場所も存在する。様々な価値観が交差する社会が存在することがこの街の魅力なのだろう。東京学は未完のままに終わるとあったが、未完のままの方が面白いと思うし、これからもこの街の新しい発見が見つければ面白いと思う。

今後外国人がますます増えてきたり、東京オリンピックが開催されることになったりして、また東京の姿も変わっていくことになるとは思いますが、東京を楽しむ人々は変わらずにいると思う。日常生活で恩恵を受けている部分もあれば、ストレスを感じている部分もあるが、これからも東京という街と折り合いをつけながら上手に付き合っていこうと思う。

小川和佑『東京学』新潮社

二等

「自分勝手」が未来を脅かす

心理カウンセリング学科3年

會田 榛馨

「住宅地に熊が出た！」最近目にしたニュースである。近隣の住民は「なぜ住宅地に熊が…」「早く捕まえて欲しい」と嘆く。普通はそうだろう、私もその場にいたら全く同じように答えると思う。しかし熊の立場から考えたらどうだろうか。熊からしたら人間が今住んでいるその住宅地は、かつての熊の、また他の動物たちの住処だったのではないだろうか。人間が元々居た生物たちを追い払って居住地にしている可能性は？人間は人間以外の居住地に踏み入っていないと言えるのか？人間と熊の立場を逆にとしてみると、人間が全く持って熊を責められる立場では無いことがうかがえる。言ってしまうと「他人事」であるニュースを見て、他人事であるが故に人間の自分勝手さに目がいてしまったある日のことであった。

ほんの少し心理学から離れたいな、と思いながら本を探していた時に、ある一冊の本が目にとまった。私が読んだのは1962年にレイチェル・カーソンによって書かれ、1964年に青木梁一によって訳された『沈黙の春』だ。化学薬品を使いすぎることによって起こる自然や生き物への影響などを、当時よく使用されていた化学薬品が原因で起きた実際の悲惨な事故を数多く取り上げ、化学薬品を濫用しすぎる事の恐ろしさを述べた本である。化学薬品の濫用による様々な影響をいち早く警告し現代の自然保護運動のきっかけになった、という紹介文。今でも影響力のある本ということでとても興味が湧き、すぐさま本を手にとった。

化学薬品と言うと農薬を思い浮かべやすいため私たち消費者には関係の無いことだと考えがちだが、生産者が使用した化学薬品が農作物を通じて私たちのからだに密かに蓄積されていくこと、他にも日常生活で使うであろう殺虫スプ

レーなども化学薬品に含まれることを考えると、無関係な人はほぼいないと言える。私自身も虫が出た時は殺虫スプレーを使用するし、野菜や果物を食べる時も何の化学薬品を使っているかなんて気にしたことがない。知らず知らずのうちに私自身のからだにも、微量だがそういった物質が蓄積しているかもしれないと考えると、今までは関係ないだろうと思っていたものも他人事には感じられなくなってくる。

化学薬品は便利なものであるが、便利だからといってむやみやたらに使うのはよそう、しかしそれは決して化学薬品を使用するなということでは無い、というカーソン氏の意見について、私は同意する。効果や副作用がわからない薬を医者は処方しないのと同じように、化学薬品も効果と引き起こされる危険性をしっかり把握しておくべきだと考える。化学薬品の製造者や販売者が説明してくれないから、などの言い訳は通用せず、現代はインターネットが普及しているため、自らの手で調べて安全性を吟味した上で使用することが必要なのではないだろうか。

しかしこの「安全」というのは哺乳類、特に人間から見た安全であって、追い払いたい害虫以外にも、余計な危害を加える可能性は充分にある。たとえばAという害虫を追い払いたいので殺虫剤を使った、しかしそのAを天敵としていた、人間に害のあるBという生き物が大量繁殖してしまう、Bを追い払うためにさらに強い殺虫剤を、しかしまた別の害虫Cが大量繁殖して…。カーソン氏は「自然は繋がっている」というように表現している。空気、水、地面、生き物、全てにおいて地球上で孤立しているものは無い。地面は微生物のはたらきで良い土壌が作られている。植物があるから酸素が作られる。道端に生えた、人間から見たら邪魔でしかない雑草だって、生き物にとっては大切な食糧かもしれない。人間が自分たちの利益のために他の生き物を追い払い続け、自然の均衡を崩しぐちゃぐちゃにする。バランスが崩れたことにより、本来生きられるはずだった植物や動物が絶滅の危機に一步步、音も立てずに歩み寄っていく。絶滅したものは生き返らない、化学薬品によって汚染され住めなくなった土地には生き物は寄り付かず、春が来ても鳴き声もしない。このままバラン

スを崩し続けるのであればカーソン氏が警告していた、まさに「沈黙の春」が人間の手により訪れようとしている。悪循環はいつ途絶えるのだろうか。地球では自然の中に様々な生き物が生活している。人間はその中のたった一種類である。その人間が地球の環境を、自然を、利益のために崩しつつある。人間は利益だけのために人間から見た害のあるものを排除し続ける…。「人間の自分勝手さ」の現れなのではないだろうか。

また「安全」について、化学薬品を浴びた個体ではなくその子孫に、病身や短命などの悪影響を及ぼす化学薬品もあることがカーソン氏により述べられている。今は安全だとされていたとしても、後世に、自分の子に悪影響が及ぼされる場合があるかもしれないということだ。今害はないからといって濫用しすぎるのも危険性の高いことであると思う。そのためやはり化学薬品そのものがどういった効果があり、どういう危険性があるかという、化学薬品についての知識をつけることが化学薬品の安全な使用への一番の近道、また、「人間の自分勝手」にブレーキをかける術だと私は考える。

この『沈黙の春』は1962年に、アメリカでの化学薬品の使用について書かれたものである。古いから。日本じゃないから。今の時代はそんなこと無関係だ、なんて誰が言えよう。

調べてみると、殺虫効果が強いが生物に大きな害のあるDDTは1970年代までに日本では使用が禁止されている。しかし本で紹介されていたその他の殺虫剤や除草剤は禁止されたとの記載が見つからなかった。執筆された当時に使われていた劇薬ほど毒性は強くないかもしれないが、現在使われている化学薬品も虫や植物を「殺す」ものであるため、全ての化学薬品が100%無害と言い切れる訳ではないと思われる。

カーソン氏は本文でこう述べている。「私たちにわかっていることと言えば、ほとんどがにがい経験をしてのことなのだ。」

私たちが今口にしている食べ物に使われた化学薬品、普段使っている殺虫剤の成分、それらがじわじわとからだに蓄積しているかもしれない。蓄積しているとしたら、食物連鎖の最後である人間は相当な量の濃縮された化学薬品をか

らだに蓄えていることだろう。現在では悪影響が出ていないかもしれない。しかし今後も同じように悪影響が出ないと言いきれぬのか。それがあつ時爆発し「にがい経験」として後世に語り継がれていくのか、はたまた全くの無害なのか、誰にも予想は出来ない。冒頭でも述べた「人間の自分勝手さ」故、便利なもの、ここで言う化学薬品を濫用していくのだろうか。化学薬品の効果や危険性を正しく学び正しく使い、賑やかな春を迎えるのだろうか。

「私には関係ないや。」そんなことまだ言い続けられますか？

自らの手で自らの未来を破壊しているかもしれないのに。

レイチェル・カーソン 『沈黙の春』（青木梁一訳）新潮社

二等

これからの日本に必要なものは何か。

心理カウンセリング学科3年

白岩 綾花

今日における日本が平和であると断言することはできるのだろうか。日々の中で犯罪に関するニュースが目に入らない日はない。殺人や虐待、窃盗から横領まで多種多様な犯罪が現実には起こっている。そんな日本の社会状況から何故「安心」や「信頼」といった言葉がでてくるのか疑問に思ったところから始まり、これから就職活動を控えている身として現在の社会について少しでも知ることができるならと思いこの本を手にとった。

この本における「安心」と「信頼」について、明確な違いを説明できる人はどのくらいいるのだろうか。私は漢字検定や日本語検定に挑戦したことがあり資格も取得しているが大学生以上のレベルになるとここまで簡単な漢字は出題されない。しかし、簡単な漢字ほど説明しろと言われるとこれが案外難しい。これは、難しい漢字や語句ほど読んだり使ったりするので意味がわからなければ調べて覚えるが、普段から当たり前に使っている言葉や語句はそれが当たり前となっているので調べることはしない。よって、いざ説明をしようと思うと的確な説明はできないものなのである。

当書では、「信頼」とは、社会的不確実性が存在していない場合にのみ意味をもつとし「安心」とは、社会的不確実性が存在しない状況についての認知であると述べており、これは、危険にさらされる「自己利益」が大きければ大きいほど、また危険の程度が大きければ大きいほど、社会的不確実性が大きいと言えるのである。

この「信頼」と「安心」について当書ではいくつかの例が挙げられているが、自身の経験と最もマッチングしたのは次のものであった。

「針千本マシン」という架空の機械があり、これを喉に埋め込まれた人間が嘘

をついたり約束を破ったりすると、自動的に千本の針が自分の喉に送り込まれる、という仕組みがあったとする。この時、「針千本マシン」を装着した相手が約束を破らない（だろう）という期待、すなわち相手が嘘をつく意図をもっていないという期待は「安心」にあたる。なぜなら、嘘をつけば針が喉に送り込まれるのだからそんな状況の中で嘘をつく人は、死にたいと思っているなどのよほどの理由がない限りはないからだ。これに対して「信頼」は、相手が搾取しようとする意図をもっていないという期待の中で、相手の人格や自分に対して抱いている感情についての評価にもとづく部分に限られる。要は相手が自分をどのように見ているのか、自分とどのように接しているのかという状況からこの人なら大丈夫だと思える期待を「信頼」と言うのであろう。

例えば、私には本当の親友と呼べる人が3人いる。最近は定期的に会うようにしており、毎回あった日に次の予定を決めその予定が近づくと連絡を取り合う。そして会えば思い出話や現状報告に花を咲かせ、またいつものように笑顔で別れる。そしてあっという間に1日が過ぎる。ありきたりな体験談であるが、この中に「安心」と「信頼」は存在しているのである。当たり前のように次の予定を立てまた会い、いつものように笑顔で別れる、これが「安心」であり、会えば思い出話や現状報告に花を咲かせるのが「信頼」なのである。当たり前ではないことが当たり前になっていることを「安心」と呼び、ただ話すだけでなく今まで起こったことやこれからのこと、良いことも悪いことも包み隠さずに話せる間柄には「信頼」があるのだと私は思った。2つの熟語を対比させそれぞれの意味について考えることは多くない。故に難しく考えてしまいがちだが、このように自分の体験談と交えて内容を整理することで理解をしやすくすることができる。

では、当書のタイトルにもなっている『安心社会から信頼社会へ』にはどのような意味が込められているのだろうか。

日本人は「集団主義的」な思考がある。日本の組織の大半はチームで動いてチームで仕事をする。特定の職において経験者と未経験者とでは仕事をこなすのに時間がかかるのは仕方のないことだ。仕事を上手く配分し終えることがで

できれば一人の負担は減る。しかし、失敗をすれば失敗した人のフォローを誰かがしなければいけなくなる。また、集団で行動し周りの意見に合わせる人だっている。そうすることで自分の存在が目立つことはなく、周りに合わせておけば嫌なことは誰かがやってくれるしできないことは誰かに頼ればよいという“安心”が生まれる。これが「安心社会」なのである。

仕事以外でも、逆らえば自分がいじめの標的になる。故に自分もいじめに加わる、そうすることで自分は大丈夫、いじめの標的にされることはないという“安心”する。そこに自らの意志は存在しない。このように、例を挙げればきりが無い。

そんな今の日本に必要なのは周りに合わせて行動する人の多い「安心社会」ではなく、一人一人がしっかりと意志を持ち、支え合い、嫌なことから逃げずに戦う、そしてそこから生まれる“この人（たち）となら”と思える「信頼社会」を築くことなのである。

当書では「安心社会」から「信頼社会」への変化は、新しい文化の創造のプロセスであると述べている。この新しい文化の創造のプロセスは、一人一人が新しい社会的環境へ創造的に適応することで参加できるプロセスなのだと言っている。これに私も同意見であり、最早これを新しい文化とすることで、より良い社会を私たちが創造し変えていくことで「安心社会」から「信頼社会」へと移行することができるのではないかと私は思った。

山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』中公新書

佳作

将来の夢について考える

心理カウンセリング学科3年

青山 明日香

私はずっと「将来の夢はなんですか？」という質問に困っていた。アイドル、声優、お花屋さん、どれも違うけど分からない。私は将来の夢を先延ばしにしていたのだと思う。大学生になった今でもやりたいことを見つけられず、業界を絞れずにいる。そんな時、中学時代先生が薦めていた本を読もうと思った。私はこの本の題名『夢をかなえるゾウ』という言葉に希望を感じたからだ。読み始めると、いきなり出てきたのはガネーシャという象の見た目で関西弁を喋る不思議な神様。ガネーシャは人間味に溢れており、タバコが辞められなかったり、茶番をやったりする。そんなガネーシャに、主人公と一緒に腹が立ったり、思わず笑ってしまったりすることもあった。

そんな怪しい神様、ガネーシャは変わりたいと願うサラリーマンの主人公に対して、毎日課題を一つ出すことになった。課題は納得するものから疑いたくなるようなものもある。私も主人公のように、毎日課題に取り組んでみたが意外と難しい。トイレ掃除、募金、身近にいる一番大切な人を喜ばせる。行動を起こすこと、続けることがどれだけ大変かよく分かる。その一つに仕事についても話をしている。

ガネーシャの教えの一つに人の欲を満たすこと＝自分の欲を満たすことというのがある。人気があるお店に入った主人公はなぜ人気があるのかをガネーシャに尋ねられる。分からない主人公に対しガネーシャはこう言う。

「(前略)一つ言えることはな、この店全体でお客さん喜ばせようて気持ちがあるんや。『この商品、原価安いから儲かるわ』とか『お客さん早く帰らせて回転率上げよ』なんてお店側の都合はあらへん。お客さん、つまりお前や。お前を喜ばせるために、この店はめっちゃ頑張ってるねや。だから、この店には魅力

があるんや。お前が『雰囲気いいなあ』って思うのも、この店全体がお前を愛してるからなんや。」

人の役に立ちたいから仕事がしたい。そう思うことはあっても自分が不幸だったら本当に出来るのか、命をかけてできるのかと尋ねられたことがあり私は悩んだことがある。自分も幸せで相手も幸せになれること、その答えがきっとガネーシャの教えなのだ。人の欲を満たすことは簡単ではない。相手のことを考え、心を込めて時間をかける必要がある。それを仕事と考えるのか、人のためであり、自分のためでもあると考えるのかによって感じ方が変わるだろう。私が昔所属していた演劇部では部員が少なく、役者も裏方も監督も自分の役割で精一杯だった。そのとき主役を演じていた私は監督に雰囲気を作って欲しいと頼まれていた。だから、劇では台詞も動きも一番初めに覚え、役者陣のテンションが上がるように声をかけた。監督の相談にのり、出来ることを手伝った。劇が終わったとき、みんなに感謝されて何より嬉しかった。いい劇が出来たと私が頑張れたこと誇りに思えた。だからガネーシャの教えは納得できた。

課題を進めた主人公はある日ガネーシャに、このままでは変わらないと言われてしまう。その翌日から出される最終課題の5つには、本当に変わるために重要なことが書かれていた。新卒で入社した主人公は今の仕事が本当に自分のやりたいことなのかと疑問に思う。お金持ちになりたい、自分にしかできないようなことがしたい。だから変わりたい。誰もが思うことだろう。私自身もそうなりたいと思っても出来ないと思っていた。しかし、そうではない。私はこの本から成功している人との違いなんて才能ではなく考え方と行動力の差だということが分かった。

ある日の最終課題、

「(前略)何か、自分の想像を超えるような『事件』が人を劇的に変えるねん。」

「まあ事件にもいろいろあんねんけど。ま、1番効果的で劇的な変化が望めるんは……」

「『誰かに才能を認められる』や」

私は今まで褒められても謙虚に受け止め、自分には長所がないと思っていた。

これは私一人の解釈だった。「(前略) 自分自身を世の中にアピールすんねん。起業支援の団体に事業プランをプレゼンしてもええし、資格試験受けてもええし、もう何でもええんや。とにかく、自分の才能を他人に判断されるような状況に身を置いてみるんや。……」

私は下手だと言われることが怖くて、好きだと分かっているにもかかわらず、出来ていないことがあることをこの時思い出した。演劇だ。高校生からずっとやりたくて、大学で思い切って入った演劇部は1年で潰れてしまった。それからずっと理由をつけて出来ていなかった演劇。やりたいと心の底から思いその日、インターネットで劇団を探し応募していた。その日は気分が軽く、こんなにワクワクした日はいつ以来だろうと思った。

将来の夢は職業だと思い込んでいたがそれは1つの手段で、どう生きるのかが大切に思えた。私はみんなでなにかを作ってそれを共有出来る時間が大好きだ。これは演劇だけではなくどんな仕事にもあることだろう。だから私は迷わずなりたい将来の夢について胸を張って言える。私はガネーシャから好きなことに素直になることを教えて貰った。今なら「将来の夢はなんですか？」と言われたら「好きなことを一生懸命やること」と笑顔で答えることができる。

私は将来の夢について考えてこの本を読んだが、他の視点から見てもガネーシャから教えてもらえることは多いだろう。すこし変わった神様に教えてもらう人生を成功する方法は、多くの人に知ってもらいたい。

水野敬也『夢をかなえるゾウ』 飛鳥新社

佳作

『置かれた場所で咲きなさい』を読んで

韓国語学科3年

大曾根 帆風

最近、「幸せ」とはなんだろうか、と考えることが増えた。こんなことを呟くと、私より年上の人には「何を言っているの。まだ二十代なのに。」と返される。いつも通りに朝がやって来て、なんとなく時間を使い一日を終える。そんな変哲もない毎日を過ごす中で思ったのが「幸せ」についてだ。確かに今は「不幸」ではない。住む場所もあれば食べ物にも不自由していない。ただどうしても今が「幸せ」とは感じないのである。

そんな時に出会ったのがこの「置かれた場所で咲きなさい」だ。普段、あまり活字を読まない私にも読みやすそうだと、という単純な理由からこの本を手にとった。

はじめに、の時点で私はこの本を選択したことを少し後悔した。「咲けない日があります。その時は、根を下へ下へと降ろしましょう。」この一文の意味が全く理解できなかつたからだ。果たしてわたしが「咲く」場面などあるのだろうかと考え込んだほどである。だがこの疑問に対しての答えは読み進めるにつれて得ることができた。

そもそもここでいう「咲く」というのは修道院に入ることを決意した筆者が、アメリカの修練終了後、岡山の大学に派遣されたのち学長に任命されるなど思いがけないことの連続で、思いつめたところ一人の宣教師が渡してくれた英語の詩の冒頭一行にある「置かれたところで咲きなさい」という言葉から来ている。著者のように短期間に生活環境が大きく変わることが続くようなことはめったにないが、一つ問題が発生すると悪いことは続いてしまうことは少なくはない。そういったようなつらい場面でも自分のことを見失わず今置かれた状況を一生懸命やり抜きなさいということ传达了かつたのではないかという風

に捉えた。

また、文中に「働きにおいては、大きな成果を挙げたとしても、木を切っていた斧である自分自身が、その間、心身ともにすり減っていたとしたら、本末転倒ではないでしょうか」とあるが、この文を読んだ瞬間、こみ上げるものがあった。私が高校生の時にバスケットボール部のマネージャーを務めていた。数年前にインターハイに出場したこともある伝統校で、その分、部則や上下関係がとても厳しかった。私は立場上、同学年のチームメートに厳しい指摘をしなければならないことが多く、そのためか冷たい態度を取られることがしばしばあった。そんな状況に加え、一個上のマネージャーは私ではないもう一人のマネージャーの子をよく可愛がり、仕事を教えたり、県外遠征に連れていくのもその子を優先した。さらに後輩が仕事を出来ていないと、顧問の先生や先輩に「マネージャーの指導がしっかりしていないからだ」とあらゆる方向で苦しい状況に陥ってしまった。その時はチームのため、選手が心置きなくプレーできるようにと、上からのどんな強い指摘も耐え、コートを何往復もしていた。だが二年生の夏に自分をないがしろにして周りを優先しすぎたツケが回ってきたのか、うまく笑えない、食事がのどを全く通らない、などストレスによる精神的にボロボロになり、最終的には協調性が重要な団体競技であるのに対し、チームに迷惑をかけないように自ら単独行動をするようになった。選手のみならず逆に私に気を遣うようになり、どうしてこんな関係なってしまったのか考え、私がすべて悪いと罪悪感でいっぱいになり、気づいたら泣いていた、というような日々が続いた。まさに「本末転倒」である。もし、この一番苦しい時にこの本に出会えていたら自分のことをもう少し大事にすることができたかもしれない。

このようなことがあったからか高校を卒業した今でも、基本的にネガティブで、自分に対しての劣等感がいつまでたってもなくならないが、この本を読んだから、考え方を少しずつではあるが変えるように努力するようになった。また、人と関わることはあまり好きではなく怖いと思っていたこともあったが、今では一人でいる時間の方が苦手になった。

あとがきを読むと著者は幼い頃にすぐ目の前で父親を銃殺され、50代過ぎてから病気に苦しまされていたりと、私の苦しさとは比べ物にならないくらい壮絶な生涯を過ごしている。それにもかかわらず常に前向きな姿勢を取っていることに対して、私もこんな風な素敵な考え方ができるようになりたいと素直に思った。

これからは就職活動がすぐ目の前に控えており、決して楽しいことではない。むしろ苦しい、もう辞めたいと思うことの方が多いだろうが、そんな時は俯いて「なぜ私だけこんなに苦しい思いをしなければならぬんだ」、と嘆くのではなく、自分のステップアップのために、必要なことだと感謝していこうと思う。

まずは自分自身が咲き、いつか多くの人を「咲かす」ことができるような人間に私はなりたい。

渡辺和子『置かれた場所で咲きなさい』幻冬舎

佳作

ホセ・ムヒカに学んだこと

心理カウンセリング学科3年

鈴木 瑞貴

「貧しい人間というのは、いつもカネばかり追いかけ、それにとらわれている人間のことを言うのさ。」

これは、国土が日本の半分ほどで、自然の資源に恵まれた国、ウルグアイの元大統領が言った言葉だ。彼の名はホセ・ムヒカ。ムヒカ氏は大統領とは思えない質素な暮らしぶりから「世界でいちばん貧しい大統領」と言われている。

本書はムヒカ氏に19年間密着取材していたウルグアイのジャーナリストたちによる、ホセ・ムヒカのこれまでの人生の記録である。ムヒカ氏に起こった出来事や、それに対するムヒカ氏の考え、ムヒカ氏の普段の様子などを本人の言葉を織り交ぜて記している。世界でいちばん貧しい大統領は何を思うのか。もちろん私は彼自身に会ったことはないのですが、すべてが分かるわけではない。しかし、ムヒカ氏の言葉から学び取れることは山ほどあった。

そんな中でも、特に学びになったことは、二つあった。

一つ目は、幸せについてだ。

ムヒカ氏は貧乏だった。人生で四回も獄中生活を送り、一回目の時は牢屋でめった打ちにされた。四回目の時には、牢屋に流しも換気扇もマットレスもない生活が続き、アリの話しかけ、謔言をぶつぶつと唱えるような精神錯乱にまで陥った。そんなことがありながらも、一国を治める大統領にまで上り詰めたムヒカ氏は、「獄中での孤立無援の状態を経験したからこそ、わずかなものしか持っていなくても幸せになれることを学んだ。」と語る。実際にムヒカ氏は大統領職に就いて得た報酬の八割を寄付に当て、三部屋しかない田舎の家に住み、愛車の古びたビートルに乗っていた。なぜ彼はそんなことが出来たのだろうか。その答えは本書の中にあった。

ムヒカ氏にとっての喜びは、「意欲的に生き、何かに力を注ぐこと」だった。情熱的であることで、生きる喜びを全身で深く感じていた。そして、仕事をすよりも家族と共に過ごすこと。テレビを見るよりも一緒に料理をすること。そんな日々の最も基本的なことに時間を費やすことが幸せだと説いていた。

今まで、私の中には幸せになれる第一の条件はコレ、という確固たるものがあつた。それは、お金だ。きっとこれを読む人の何人かには浅はかな考えだと思われるかもしれない。しかし、お金があれば経済的に安定した生活が手に入り、心にも余裕が生まれる。そして、好きな洋服やお化粧品を買え、趣味も満喫できる。働くだけの人生ではなく、楽しい生活を送ることが出来る。反対にお金が無くては働く以外何もできない。あれは、リーマンショック以後だろうか。当時の私は幼かったので理解していなかったが、母は、「おじいちゃんがお金持ちで良かったね。」とよく言っていた。ここで言う「おじいちゃん」とは私の父方の祖父だ。確かに祖父は普通か、それ以上にお金を持っていた。家は大きく、ほぼ毎月旅行に行き、年に何回かは頭までついた大きな蟹を2尾ほど取り寄せていた。リーマンショックの影響で父の給料が下がっても、祖父の貯えのおかげでうちが貧乏だと感じたことは無かつた。お金があるから楽しく暮らしていける。そういった暮らしからか、全ての喜びはお金あってこそ、と、その考えは心の奥のほうで眠るようにひっそりとあつた。

しかし、それは間違っていた。私にとっての喜びはなんだろうか。私の幸せはなんだろうか。自分自身に問いただしてみた。すると、お金を得ることで、モノを沢山買うことでもなかつた。私にとっての幸せは、近くに家族だったり友人だったり大切な人がいて、和やかに、平和に、笑い合えることだ。不幸なことが起こらずに、ずっとずっとそんな生活が続けば良いと心から願う。この先、人生に迷いが生じたら、私は私の幸せについての考えを軸に方向を決めるだろう。

もう一つの深く感銘を受け、胸に刻まれた言葉は信念についてだ。

ムヒカ氏は、「信念のない人間は、サヨナラと言って立ち去るしかない。迷いのある状態では誰も導くことはできないし、だからこそ各々の信念について

じっくり考えなくてはならないんだ。」と語った。私はこの言葉から、「自分を信じることが大切である」と学んだ。信念を持っている人は強い。なぜなら、その人は信念を持つ自分自身を信じているからだ。自分を信じている人には周りもついていく。反対に、自分を信じていない人は何もできない。だからこそ、自分を愛すことや、自分に自信を持つことは大切である。当たり前のことに聞こえるが、日本人はこれが苦手だ。自分を好きですか、自分に自信がありますか、と問えば首をひねって考えてしまう人が多い。しかし、考える必要なんてどこにもない。大きな声で自分は自分を好きだ、自信がある、信じている、と宣言すれば良いのだ。それを批判する人は誰もいない。

自分を信じることは、自分の力を引き出す。何だって出来るだろう。何だって乗り越えられるだろう。私は自分を信じて、自分に自信を持ってこの先の人生を生きていく。

本書は政治や社会だけでなく、人生や生き方について多くの学びをもたらしてくれた。この先をどう生きていくか深く考え、仕事が人生の全てではないことにも気づいた。就職活動やこの先の人生に悩む時期に本書に出会えたことに、感謝の気持ちで一杯だ。図書館で借りて読んだ本だったが、本屋で購入して座右の書として手元に置き、この先の人生で何度もこの本を開きたい。また、本書がこれからも沢山の人の手に読んでもらえることを願う。未来に悩む大学生にも、苦しく働く社会人にも、心が貧乏な人にも、政治家にも、本当に多くの人に、本書は何かをもたらしてくれるだろう。

アンドレス・ダンサ／エルネスト・トゥルボヴィッツ

『ホセ・ムヒカ 世界でいちばん貧しい大統領』（大橋美穂訳）KADOKAWA

2019年度図書委員

心理カウンセリング学科	丹 明彦
心理学研究科	浅野 憲一
人間福祉学科 (生涯福祉研究科)	六波羅 詩朗
子ども学科	山中 智省
児童教育学科	小宮山 郁子
社会情報学科	張 元宗
メディア学科	西尾 典洋
地域社会学科 (国際交流研究科)	石井 貫太郎
経営学科 (経営学研究科)	近田 典行
英米語学科 (言語文化研究科)	薬師 京子
中国語学科	胎中 千鶴
韓国語学科	李 ソラ
日本語・日本語教育学科	金澤 裕之
リハビリテーション学研究科	立石 雅子
歯科衛生学科	天羽 崇
製菓学科	根本 将博
ビジネス社会学科	神山 直子
新宿図書館長	今野 裕之

2019年12月13日発行

編集・発行 目白大学新宿図書館

